

## 「教える」プロセスと教育サービス

### The Process of Teaching and Education as Professional Service

石 上 普 保

Yukiyasu ISHIGAMI

#### Abstract

Consumer-centered education is crucial for survival of many universities in Japan. It can be provided by concerted efforts of the faculty and the institution. First, teachers as the professional-service provider are expected to possess high-level delivery skills as well as the knowledge of the subject matter. Secondly, professionals, including teachers, conduct their businesses, taking advantage of IT. Thirdly, institutions should have clear educational objectives as competencies to achieve.

#### 要 旨

消費者中心の教育は、日本の大学の多くにおいて生存の重要事項である。教員と大学側の協同により提供できる。まず、教員は、専門サービスを提供する専門職として、専門知識に加うるに、高いデリバリー技能を有する。第二に、教員を含み、専門職は IT を駆使し仕事をする。第三に、大学は達成能力に関し明確な目標を示す。

#### キーワード

教え方、教育サービス、IT 応用教育、能力カリキュラム

#### 1. 専門職としての教育

最近10数年間の世界における出来事は歴史的パラダイム変換を示唆し、人間生活全般への反省を迫り、変化に応ずる変革を求めている。同時に、その急激な変化に応ずるかのよう、IT (Information Technology) が天文学的なペースで進歩している。すべての分野において、伝統的な枠を越える思考・方法が必要になっている。教育も例外ではない。本稿では、現在、大学教育に必要とされる思考・方法を考察したい。

教育は、教える側が学ぶ者に提供する専門サービスである。教員は、医者や弁護士同様に、プロフェッショナル（専門職）である。専門サービスは、一般サービスと異なり、サービスを提供する側に高度の専門性がある。プロ

フェッショナルは、通常、高度の訓練を経て、専門職に就き、自己管理により、高い職業的水準を保つ。高度の専門知識を有し、その専門知識を応用してクライアントが必要とする判断・処置を下す能力を持つ。サービス業務の性質上、当然のことながら、専門的判断・処置をクライアントに話して伝える能力—デリバリー技能—は必須技能である。

教育においては、教科を教えるというサービス提供に加えて、サービスを受ける側に精神的な影響を与え、人生一般につき助言・指導する。これにおいて成功した場合、その結果として、教える側は教える側に尊敬の念を持つ。教科を教えるには、クラスを通して同時に多数のクライアントに、サービスを提供するので、デリバリー技能はことのほか重要になる。

加えるに、医療・法律サービスと根本的に異なり、教育は、人的資源の開発という機能を持ち、社会の未来に直接的に関わる。従って、教員は、それに応じた責任を持つことになる。

大学には、研究を主とする（大学院）大学、研究と教育が同様に重要視される大学、および教育を主とする大学が考えられる。このうち、研究を主とする大学を除いて、教育の質は大学の維持および発展に大に関わる。少子化の現在、大学教育は相当に「買い手市場」の趣を呈し、サービス提供側（大学）は、他に勝る教育サービスを「買い手」に提供しなければならない。

このような観点で教育を捉えたと、「教育」大学は、多数の教員という専門職を抱えた教育集団である。法律事務所が、異なった分野を専門とする弁護士を抱え、総合法律サービスを提供するのと、同様である。教員各自がサービスの質を高く保ち、他の分野を専門とする教員と協同して、質の高い総合教育サービスを提供することにより、消費者ないしは社会の高い評価を受け、クライアントが教育サービスを求めてくることになる。

教育をこのような観点で捉え、対処する方法を考えたい。何かの仕事を遂行する場合、まず、(1)仕事そのものを理解する、(2)その仕事を遂行する方法を開発する、および、(3)仕事の理解と遂行方法を絶えず改善する努力が必要である。始めに、人間関係の基本であるコミュニケーション、教員の仕事としての教育、次に、デリバリー技能あるいは教え方を論じ、最後に、教育効果を保証するコンピテンシー・カリキュラムについて論ずる。

## 2. コミュニケーション

デリバリー技能は自己のうちにあるものを相手に伝えることであり、コミュニケーション能力と呼んでもいい。コミュニケーションは、どの相手に対しても一様ではなく、相手や状況などにより多様な方法を取る必要がある。コミュ

ニケーションの主たる手段は言語である。そこで、相手や状況を感知する能力と言語（特に、口語）能力は、プロフェッショナルは絶えず切磋琢磨する義務がある（これらのことは、最近のグローバル化により、文化的感知能力や外国語使用能力にも当てはまる）。

教育は、教員・学生間のコミュニケーション活動である。コミュニケーションは、本来、個人と個人の中に生じるものである。教育の主形態であるクラス授業は、経済という別の理由で、用いる形態に過ぎなく、教員は個々の学生を相手にしていることを忘れてはならない。コミュニケーションは話し手と聞き手の間に起こるものであり、相互学習活動である。教員は、学生に教えると同時に、学生からも絶えず学んでいるのである。人は人生を終えるまで学習しているのであるから、教員も学生も本質的に同じ学びの道にあり、同等である。たまたま、教員は年長者であり、知識を多少多く持っているにすぎない。「教え込む」という態度、あるいは、教員はもともと学生より上である、「教師」という姿勢を取るなら、それは、自身の専門職を理解していず、結果として自らを苦しい立場に追い込むことになる。教員に対する尊敬ないしは権威は、仕事の成功の結果、学生の心に自然に発生するものであり、始めから既成事実としてあるものではない。教員がその仕事に成功し、学生に教員への尊敬心が生じた場合、それは更なる成功の源となり、教員と学生両者の仕事がより容易になる。

コミュニケーションの基本は、相手の話を聴き、相手を知ることである。クラス授業においても個人指導においても、基本的な精神は同じである。相手を知するには、まず、相手に自由に話してもらい、言い分をそのまま聴き、理解することが必要である。相手の言い分が理解できれば、そこに述べられた事実関係がそれなりにわかる。自身の発言は最小限とし、必要な情報を得るための最小の質問に抑える。よい聞き手として機能し、相手をリラックスさせ、自由に

自ら話すような気分にする。

聴くことにより、事実関係に加えて、そこにあるメッセージを読み取ることができる。メッセージとは、話し手の言い分を越えて表されている言外の情報であり、話し手の正確性、客観性、主観性、自己中心性、論理性、成熟度などである。聞き手としての教員は、その注意力を聴く作業に集中し、そこにある情報を収集し、理解し、整理し、それに基づいて、判断する。このように相手の言い分を聞くことにより、学生・教員間にある種の人間関係を成立する。この関係に基づき、次の作業に向かう。

相手に話させたら、次に、教員は自身の反応・言動を起こすことになる。反応・言動は、あくまで、学生の学習効果に沿ったものでなければならない。教員の反応・言動は、心理学でいう「強化」(Reinforcement) と呼ばれる作用を持つ。学習効果を上げるのは「正の強化」(Positive Reinforcement) であり、「負の強化」(Negative Reinforcement) は学習効果を下げる。「正の強化」とは、学習者にとって報酬として機能するものである。ほとんどの場合、言葉で「ほめる」ことである。学習者が恥ずかしがり屋であり、皆の前で「ほめる」ことが恥ずかしい気持ちを引き起こすなら、それは「負の強化」になる。このような学習者には、「肯定的な視線」など、当人にとっての「正の強化」を与える。

学習者にとって「いや」なことは、「負の強化」として働くので、教員として絶対に避けなければならない。学生の言動のうち、「誤った」、「悪い」、「直してほしい」、などと感じられるものに対して、教員が否定的な反応(多くの場合、言葉で)をするなら、「負の強化」になる。「負の強化」は、必要以上に「否定性」に注意を向け、泥沼的な状況を作り出す。教員は、学習者の「否定的」な言動に対しては、単に「無視」して、先に進めばよい。学習者の「否定的」な言動は、一方的に「叱る」ことによって、その場で矯正できるほど、簡単な問題ではない。コ

ツコツと長期的に「正の強化」を用いて、コミュニケーション(一方的ではなく、双方向的)を維持し、学習効果を上げるしかない(「間違った」ことは、学習者に関連した問題にせず、別な機会に、一般的な事実として指摘する)。

教育も医療も法律サービスも、冷静な判断と慎重な処置を要する仕事である。同時に、クライアントの気持ちを感じ取り、共感し、事に当たる心を持つことも、これらの専門職に要求される適性の一つである。この適性は、職業的・人間的成長とともに、発展することは言を待たない。教員の場合、クライアントが若いので、より仕事が困難であるが、人間形成という未来に備える仕事における喜びも大きい。

### 3. 教員の仕事

「教育」大学における教員の主な仕事は教える作業である。専門分野そのものと、それを学生に効果的に伝えるデリバリーの方法は、同等に重要であることを、教員は、まず認識する必要がある。両方の水準を高度に維持するための自己研修は専門職の義務である。それぞれの専門分野のための研修の機会、学術誌や学会など、伝統的な方法が十分にあるが、デリバリー技能の向上に関する機会、その必要性の認識も十分でなく、従って、これからの開発が待たれる。以下に述べることは、大きな方向を示すためのもので、それぞれの専門分野ないしは教科のために、更に個別的に開発されねばならない。

教科には、大きく分けて、知識中心のものと、技能中心のものがある。知識習得は、通常、大きなクラスにたいして、教員から学生へと一方向の講義という形態で行い、双方向的な質疑応答は時間的に非常に限られる。一方、技能習得は小クラスで行われ、より個別的な学習が可能である。前述のように、教育はコミュニケーション活動であり、究極的には教員個人と学生個人の間の双方向的学習を目指す。

そこで、このような形態を一応認めたうえ

で、学習の効果を向上させるために必要な方法を考案することになる。学習のプロセスは、ク

ラス授業、自然科学や語学などのラボ、オフィスアワーなど個別指導、自己学習等から成る。

#### 授業形態

1. 講義・説明・モデル提示	教員→クラス（複数の学生）
2. 質 問	教員⇄学生
3. グループ	学生⇄学生
4. ペ ア	学生⇄学生
5. 学習確認・評価	教員→学生

1.は、教員から学生への一方向学習である。講義の形態で、同時に多数の学生を相手に、説明や理解の目的で用いられる。技能習得を目的とする小クラスにおいては、説明ないしは習得モデルの提示が行われるが、あくまで技能習得の出発点に過ぎない。複数の学生に同時に行われるので、学生側は受動的学習となり、教員に注意を向けない学生が出てくる。

2.は学生が個々に疑問の点について、更なる説明を求める場合の形態である。少数の意欲ある学生が中心になる。

1.と2.は、伝統的に、大学で広く行われている方法である。これ以外にも種々の学習方法があり、教員はそれらを適宜に用いるべきである。

3.は、1.と2.に比して、学習参加の度合いが

飛躍的に高まる。4.においては、更に参加の度合いが高まり、ほとんど100%になる。

これらの種々の形態の組み合わせにより、教員は学習効果を最大にする工夫をする。そのためには、絶えず現状を評価する「学習確認・評価」が必要である。学生の反応により、学習の程度が判断でき、それにより、更なる「説明」が必要であれば、「更に説明する」、といった必要な処置を取る。

ここで、筆者が専門とする、技能中心の教科（英語コミュニケーション）における具体的なサイクルを示す。技能は説明ではなく、練習により習得できるのであるから、説明は最小（以下の例では、ゼロ）にし、練習を最大にする。

1.と4.と5.を用いる。

#### □答練習（絵を見ながら）

##### 1. モデル提示

教員： “What's your father doing now?”  
 “He's drinking beer.”  
 “What's your mother doing?”  
 “She's cooking dinner.”  
 “What're you doing?”  
 “I'm watching television.”

##### 4. ペア（クラス全員がペアで作業）

学生A： “What's your father doing now?”  
 学生B： “He's drinking beer.”  
 学生A： “What's your mother doing?”  
 学生B： “She's cooking dinner.”  
 学生A： “What're you doing?” (応用)  
 学生B： “I'm watching television.” (応用)  
 学生A： “What's your sister doing?” (応用)  
 学生B： “She's reading a book.” (応用)

学生A：	“What’s your brother doing?”	(応用)
学生B：	“He’s taking a nap.”	(応用)
5. 学習確認・評価（数ペアにさせる）		
学生J：	“What’re your grandparents doing?”	(応用)
学生K：	“They’re traveling.”	(応用)
学生J：	“What’s your dog doing?”	(応用)
学生K：	“She’s eating a bone.”	(応用)

（ここでは、文字を使って、視覚的に示してあり、容易に見えるが、聴覚的な作業である。実際に、正確な発音で、文法を間違えずに、この作業に成功するのは相当に困難である）

ここで留意すべき点は、技能中心の科目でも知識中心の科目でも、真の意味で「教える」ことは「実際に学習が起こる」ことである。それも、学習者「個人」に起こらなければならない。クラスの大多数の個人に起こらなければならない。それには、クラスの大多数が理解できる方法で、学習の段階を提示して、学習に参加させ、学習が起こったことを確認して、次の作業に進むのである。

また、学習には、一人ひとりの学習者の違いや創造性にうったえる学習の喜びがなければ、学習を続けることが困難になる。上記の「応用」部分は、学生の小さな「創造性」が発揮された場合である（絵にあるシチュエーションを越えて、想像してもよい）。一般に、創造性が発揮できる機会を与えることにより、学習に対する興味が増すのである。この種の成功が連続的に起これば、自立的に学習することになり、真の大学における学習となる。

この例は技能中心教科における教えるプロセスであるが、この大まかな学習段階—教員中心学習から自立的学習へ—は、知識中心の教科においても、たどる必要がある。例として、歴史の授業の早い段階で、学生が扱えそうなテーマの幾つかについて基本的な講義をする。次に、学生はそのうちからレポートのテーマを選び、次の週に草稿を提出する。その後、学生は個々に研究室で教員に会う。教員は学生の学習の方向付けをする。以後の講義は、それらの学生の

必要に応じ、教科の基準を充たすものになる。このようにして、教育の個人化を図り、学生は最終稿を仕上げる。

知識中心の教科においても、上述の種々の授業形態を組み合わせ、学習効果を上げることができる。講義で始め、グループ討論をさせ、グループ・リーダーがクラス全体に討論の報告をする、というのも一つの有効な方法であろう。それぞれの教科の教員が教科の性質に基づいた学習方法を考案する必要があり、この種の教育的議論が活発になることを期待する。

消費者（学習者）の立場に立ったサービスを提供するのは、専門職の仕事である。学生のレベルが低いのであれば、教員はそのレベルから始め、大学の教育レベルまで学生を高める必要がある。最近、大学生の学力が下がり、補習教育が話題になっている。そのような学生がすでに多くの大学に入学しているのであるから、それらの消費者に賢明に対処するのは教員・大学の仕事である。

#### 4. 教育の効果

教員の意識を変え、教育の効果を上げることは、すでに述べた。一方、教員自身で変えることのできない、既成条件がある。クラスの大きさ、授業の時間量や頻度などを大きく変えることは困難であろう。しかしながら、教員が与えられた条件の中で、作業の能率を大きく向上させるのに、強力な武器がある。冒頭で述べたITである。教員も、他の分野同様に、意識の変革とIT利用が必須となる。

それぞれ専門とする教科における個々の作業を明らかにし、ITが有効であるものはITに

まかせ、人的作業が有効であるものは、教員が行う。学習作業は、理論上は、相当のものが IT にまかせられ、遠隔教育で可能である。ここで忘れてならないことは、消費者が未完成の若い人たちであり、教員による十分な人的感化が必須であることである。従って、キャンパスにおける学習活動は依然として学習の基本である（大学院では、広く遠隔教育を用い、消費者の便宜をはかる）。

IT 利用を教育に組み込む場合、情報の発信源は教員自身と教員のウェブサイトの二つになる。例として、外国語習得科目の例を取る。一方向性の説明を講義で行う必要は、本来、外国語習得に必要でなく、書物にある説明を読めばよい。書物というメディアは即刻ウェブサイト に置ける。次に、口答によるモデル提示（上述

の1.) であるが、音声を録音したものをウェブサイト に置き、学生がダウンロードし、繰り返し口答練習をすることになる。技術的に全く問題はなく、適当なソフトを使用すれば、それほど困難な仕事ではない。次に、通常ペア（4.）で行うコミュニケーション・文法練習であるが、これも絵などを用いた練習教材をウェブサイト に置ける。ペアの一方を録音してサイトに置けばよい。学生自身が絵にあるシチュエーションを越えて、創造・応用する作業をサイトで行うのは困難であり、従来の方法である教員中心のコミュニケーション練習になる。サイト学習は、自宅ないしはキャンパスのコンピュータを通して、行う。従って、従来の語学ラボは不要になる。IT 利用で可能な学習作業：

- ・テキスト、音、絵、ビデオ教材使用のもの
- ・一方向作業および双方向の学習作業の多く
- ・機械的ないし繰り返し作業

これらはウェブ教材・学習法は、技能教科だけでなく、知識教科にも当てはまるはずである。教員が、本来、人的に行う作業は創造・応用作業であり、それに集中すべきである。「機械的ないし繰り返し作業」は IT にまかせ、その結果生じた時間を、創造・応用作業にまわす。これが IT 利用、創造・応用力重視の現代の人間的教育である。IT 利用による、教授法が個々の教科に必要であり、その開発を促進させることは、教員一人ひとりの責任であろう。

ここまでの論旨を整理すると、教育大学における教員の主たる仕事は、個々の学生への教育サービス提供である。サービスのデリバリー技能として、教え方を切磋琢磨する。IT 技能は、デリバリー技能の一部であり、教育へ応用し、教育の個人化を図る。教員は専門職であり、自己責任において、絶えず、サービスの質を高める努力をする。そこで、それぞれの教員の専門は「～教育」となる（ちなみに、筆者の専門は

「外国語教育」である）。

前述のように、教員は大学に所属して、大学の準備するサポート態勢に基づき仕事をする。他の分野におけるのと同様に、IT 利用は教育にも必須であり、そのためのサポート態勢の質が、教育の質に直接影響する。

## 5. IT サポート態勢

教員の仕事は教育サービスの提供であり、大学は教員の集団である。大学は、教育サービスに必要なサポートとして、事務職員、図書館要員などを提供する。教員は、本来、教育サービスの質の維持が本来の仕事であり、教員が使う道具としての、器具やサポート・サービス提供は大学の責任である。IT 消費者としてのレベルを超える、専門的 IT 知識・技能を、教員に求めることはできない。そこで、図書館専門要員と同様に、IT サポートを、大学内に準備し、教員が効率的にカリキュラム・教授法を作り上

げる助けとすべきである。現代の教育サービスの質には、この IT サービスのある、なしが関わる。

この学内の IT サポート要員として、教育に通じた IT 専門家が必要になる。IT に通じた教育専門家と教育に通じた IT 専門家が補完関係のチームとなり、初めて、要求されている教育効果を生じる。このような大学の IT 文化は、有形無形に学生や教員に影響し、教員全般の IT 能力を向上し、その結果、教育の質を上げ、学生が大学および社会で必要とする IT 技能を身につけることになる。

教育は未来に備える仕事であるので、教育界の IT 態勢は、そのまま、国の将来の IT 態勢を示している。IT サポート態勢を進め、ひいては、図書館員と同様な教育 IT サポート専門職を教育界に作り上げる必要がある。IT 科目を教える教員が他の教員の手助けをしているのが現状であるが、教員が片手間にこなせる程度の仕事ではない。教育 IT サポート専門職確立のための努力が文部科学省など関係筋に求められている。

## 6. 能力カリキュラム

大学も法律事務所も専門サービスを提供する専門家の集団である。どちらもクライアントのニーズに対応して仕事を行う。大学も可能な限り、学生一人ひとりのニーズや個性に応じた教育を提供する。法律事務所を訪れるクライアントは、自己のニーズを相当に理解している。問

題を意識し、達成すべき目標に対しても、かなりの目安がある。一方、大学生は、必ずしも、自己のニーズを理解していず、目標も明らかでない場合が多い。そこで、大学側は、あらかじめ、クライアントに共通の目標を設定し、その達成のためのカリキュラムを組む。教育サービスの質は、大学、学部、学科、教科など、カリキュラムの各レベルにおけるアカウントビリティにより、定まる。

教育は、知識や技能を身につけさせたり、思考能力を育てる作業である。何かが「できる」ようにすることである。「わかる」ことは、精神的に「できる」状態を意味する。カリキュラムは、一連の目標を能力として設定する「能力カリキュラム」(Competency-Based Curriculum)となる。

能力カリキュラムは、学習のために費やされる時間的プロセスではなく、学習の結果として生ずる学生の能力を重視するカリキュラムである。能力カリキュラムにおいては、達成目標を能力として明示し、目標に達成する方法を考案する。

達成目標としての能力は大学、学部、学科、学位、専攻、プログラムおよび教科など各レベルにおいて規定される。社会人として機能するのに必要な能力は、大学全般にわたる必要能力として、専攻などに関わらず、規定され、大学のすべての教育課程、科目は、それらを実現するための、より具体的・種別的手段となる。以下に、幾つかのレベルにおける達成能力の概略

### 大学レベル能力

1. グローバル・コミュニケーションに必要なコンピュータおよび言語能力
2. 社会価値観および個人価値観の認識・調整
3. 科学の影響下にある生活の認識
4. 現時問題の認識
5. 問題解決・対応および決定能力
6. キャリアー選択・準備および生涯学習
7. 選択したプログラムにおける学習
8. 芸術および人文学への対応能力と生活価値観

を示す。

これらの達成能力のうち、あるものは、文系・理系の区別にかかわらず、同等に必要であろうし、他のものは、文系・理系により重要性は異なる。重要とされる能力の記述は、更に細分化して示す。文系・理系の相違は、3.と8.の細分化に顕著に表れる。

#### 文系学士

文系学士課程を終了する者は以下の能力を有する：

1. グローバル・コミュニケーションに必要なコンピュータおよび言語能力
  - ・ 勉学・仕事に必須の日本語口語プレゼンテーション・読み・書き能力
  - ・ 生活・勉学・仕事に必要な英語能力（口語コミュニケーション能力、辞書使用一般読解力、簡単なメモ・ビジネス書簡などを書く能力）
  - ・ 生活・勉学・仕事に必要なコンピュータ運用能力（ワープロ、Eメール、インターネットブラウザ、デジタルカメラ、表計算の扱いを含む）
2. 社会価値観および個人価値観の認識・調整
  - ・ 種々の文化の観点や価値観を理解しそれにより生活の質を高める可能性および仕事に意義を見出す
3. テクノロジーおよび科学の影響下にある生活の認識
4. 現時問題の認識
  - ・ 社会科学の教科で提出された論点や関心事に対して、資料を収集・整理し、結論・解決・選択案を構成し修正する
  - ・ 種々の文化の観点や価値観を理解しそれにより多元的思考や相違を受け入れる態度を持つ
5. 問題解決・対応および決定能力
  - ・ 概念的・分析的・判断的な思考能力を

示す

- ・ 経験に対する洞察力を開発し個人的・職業的・社会的関係に用いる
6. キャリア選択・準備および生涯学習
    - ・ 自己の必要と志望を現実的に評価し、専攻を決める能力を持つ
    - ・ 職業選択と生涯学習の関連を理解する
  7. 選択したプログラムにおける学習
    - ・ 専攻を修了する能力を持つ
  8. 芸術および人文学への対応能力と生活価値観
    - ・ 人文系の教科（美術、舞踏、演劇、歴史、文学、音楽、哲学、宗教等）を履修することにより種々の価値観への感性、種々の文化における表現の意識および生活の質における重要性の理解する

#### 理系学士

理系学士課程を終了する者は以下の能力を有する：

1. グローバル・コミュニケーションに必要なコンピュータおよび言語能力
  - ・ 勉学・仕事に必須の日本語口語プレゼンテーション・読み・書き能力
  - ・ 生活・勉学・仕事に必要な英語能力（口語コミュニケーション能力、辞書使用一般読解力、簡単なメモ・ビジネス書簡などを書く能力）
  - ・ 生活・勉学・仕事に必要なコンピュータ運用能力（ワープロ、Eメール、インターネットブラウザ、デジタルカメラ、表計算の扱いを含む）
2. 社会価値観および個人価値観の認識・調整
  - ・ 種々の文化の観点や価値観を理解しそれにより生活の質を高める可能性および仕事に意義を見出す
3. 科学の影響下にある生活の認識
  - ・ 専攻に進むための数学および自然科学の基礎的理解と技能



- ・専攻を修了するための数学および自然科学の理解と技能
- 4. 現時問題の認識
  - ・社会科学の教科で提出された論点や関心事に対して、資料を収集・整理し、結論・解決・選択案を構成し修正する
  - ・種々の文化の観点や価値観を理解しそれにより多元的思考や相違を受け入れる態度を持つ
- 5. 問題解決・対応および決定能力
  - ・概念的・分析的・判断的な思考能力を示す
  - ・経験に対する洞察力を開発し個人的・職業的・社会的関係に用いる
- 6. キャリア選択・準備および生涯学習
  - ・自己の必要と志望を現実的に評価し、専攻を決める能力を持つ
  - ・職業選択と生涯学習の関連を理解する
- 7. 選択したプログラムにおける学習
  - ・専攻を修了する能力を持つ

1. グローバル・コミュニケーションに必要なコンピュータおよび言語能力
  - ・生活・勉学・仕事に必要な英語能力（口語コミュニケーション能力、辞書使用一般読解力、簡単なメモ・ビジネス書簡などを書く能力）
    - ・英語コミュニケーション能力
      - ・話す
        - ・単文および長文の理解
        - ・食事・買い物など反復的作業、計算・時刻など数量的作業、大きさ・色・形状など具体的描写作业
      - ・発音
        - ・音素運用
        - ・リズム、イントネーション
      - ・文法運用
        - ・単文運用
        - ・名詞修飾
      - ・語彙運用
        - ・基本語3,000語運用
    - ・書く
      - ・辞書を用い、長文・複文の理解
      - ・習得した口語に基づき、簡単なメモ
      - ・文法運用
        - ・単文
        - ・名詞修飾
      - ・語彙運用
        - ・基本語3,000語運用
2. 社会価値観および個人価値観の認識・調整
  - ・種々の文化の観点や価値観を理解しそれにより生活の質を高める可能性および仕事に意義を見出す
4. 現時問題の認識
  - ・種々の文化の観点や価値観を理解しそれにより多元的思考や相違を受け入れる態度を持つ
5. 問題解決・対応および決定能力
  - ・概念的・分析的・判断的な思考能力を示す
  - ・経験に対する洞察力を開発し個人的・職業的・社会的関係に用いる
6. キャリア選択・準備および生涯学習
  - ・自己の必要と志望を現実的に評価し、専攻を決める能力を持つ
  - ・職業選択と生涯学習の関連を理解する
7. 選択したプログラムにおける学習
  - ・専攻を修了する能力を持つ

8. 芸術および人文学への対応能力と生活価値観

最後に、もっとも細分化された例として教科レベルの「英語」の例を示す。

参考文献

梅本堯夫・大山 正・岡本浩一共著(1999)『心理学—心のはたらきを知る—』サイエンス社.

実森正子・中島定彦共著(2000)『学習の心理—行動のメカニズムを探る—』サイエンス社.

中西信男・那須光章・古市裕一・佐方哲彦著(1983)『カウンセリングのすすめ方』有斐閣.

平木典子著(2000)『自己カウンセリングとアサーションのすすめ方』有斐閣.

古藤編著(2000)『授業の方法と心理』学文社.